

疼痛医学

田口敏彦，飯田宏樹，牛田享宏 ● 監修
野口光一，矢吹省司，上園晶一，山口重樹，池内昌彦 ● 編

〔評者〕菊地臣一（一般財団法人脳神経疾患研究所常任顧問/福島県健康医療対策監）

今という時代、疼痛の診療や研究が、少し前と比較しても、劇的に変化してきている。その変化は、従来われわれが認識していた以上に大きい。今や、疼痛は専門家だけがかかわっていれば良い時代ではなくなっている。また、先進諸国では、疼痛対策が政府の主要な政策目標の一つになっている。

評者が大学卒業後間もない1970年代初頭、腰痛の患者が受診すると、問診と身体所見の評価の後に、必ず単純X線写真を撮影した。当然、脊椎には変性所見が認められるので、「骨棘が痛みを起こしています。歳のせいですね」と説明するのが一般的であった。治療は、安静、けん引を含む理学療法、そして薬物療法が主体であった。腰痛を生涯の研究主題としてきた評者にとっては、当時、疼痛診療の最前線が今のような変貌を遂げるとは想像もできなかった。

ここで疼痛の今を俯瞰してみる。

疼痛は、従来の「局所」の問題から、生物学的(解剖学的)因子のみならず、心理的、そして社会的因子も病態に深くかかわっていると捉えるように変化した。疼痛を考えるには、原因か結果は別にして、脳の機能も含めて考える必要があることも認識されてきた。治療効果の判定は、従来の「客観的評価」から「主観的評価」へ、「一元的評価」から「多元的評価」

へと変わった。このような時代の変化に伴い、現代の疼痛診療が多面的・集学的アプローチとなるのは、必然である。

人口の高齢化と社会構造の複雑化に伴って、先進諸国における疼痛に関する医療費は、莫大な額に達して、社会的な課題となっている。その原因は、医療技術の進歩である。しかも、治療成績の改善は得られていない。この問題の深刻さは、近年、「腰痛の危機」という特集が一流誌に掲載されるほどである(文献参照)。

研究の進歩は、慢性疼痛が活動障害のみならず、人々の健康に深くかかわっていることをも明らかにした。すなわち、寿命、生活習慣病、小児期での虐待、睡眠障害、あるいは認知機能などが慢性疼痛と深くかかわっているのである。

疼痛を含む健康は、個人の問題ではなく、個人と社会の総和で成り立っている。この事実は、教科書に昔から載っている常識である。東日本大震災に伴う原発事故は、この普遍的事実をあらためて立証した。

疼痛を巡って大きく社会が動いている今という時機で、本書が発刊された。真に、時代が要請した結果としての発刊である。

「序」に記されているように、本書はわが国で最初の「疼痛医学」の教科書である。執筆陣は、

現在、わが国の疼痛診療や研究の第一線で活躍中の人々である。基礎から臨床まで、疼痛の全てが網羅されている。本書の内容の重厚さ、多様性から、教科書というよりは良質な百科辞典の趣がある。

本書は、疼痛それ自体の全てを詳述している。評者が本書に期待するのは、疼痛に関する診療や研究を次の次元の高みに上昇させる人達が、執筆者や本書の読者の中から将来輩出されることである。その次元では、民族や文化、あるいは人間にとっての疼痛の根源的な意味もより明らかにされているに違いない。

本書の価格は、若い人々にとって安くはない。それでも、健康に関心を持っている人間なら本書を買って後悔しない。

●文献

- 1) Lancet. 2018[PMID : 29573870]
- 2) Lancet. 2018[PMID : 29573872]
- 3) Lancet. 2018[PMID : 29573871]

B5・400頁

2020年10月

定価：6,600円

(本体6,000円＋税10%)

[ISBN978-4-260-04083-9]

医学書院刊